

ヨルダン・パレスチナ・イスラエルのコミュニティが主導する、 エコツーリズムを通じた平和実現のための越境プロジェクト

ギドン・ブロムバーグ

地球の友 中東

(訳：アジア環境連帯、サステイナブル・デザイン研究所 西原弘)

はじめに

地球の友中東 (FoEME) は、ヨルダン、イスラエル、パレスチナの環境活動家によって構成されるユニークな団体である。FoEME は、中東地域において、アンマン [ヨルダン]、テル・アビブ [イスラエル]、ベツレヘム [パレスチナ自治区] に拠点を持つ唯一の組織である。FoEME の目的は、共有の環境遺産の保護、持続可能な地域開発を進めるとともに、中東地域において永続的な平和を生み出すために必要な条件を作り出すことである。FoEME は、世界最大の草の根環境組織である地球の友インターナショナルのメンバーでもある。

背景

ヨルダン河谷は、世界中の数多くの人々にとって文化的に重要な場所である。ヨルダン川はヘブライ語聖書の重要な物語に登場する。イエス・キリストはヨルダン川で洗礼を受けたと伝統的に信じられている。預言者モハメットの高貴な従者数名がヨルダン河岸近くに埋葬されている。この河谷は、人類が初めてアフリカを旅立ってからずっと、文明の通り道だった。

ヨルダン河谷はまた緑豊かな湿地生態系で、生物学的にみてこの地域全体の心臓部といえる。ユニークな動植物相に加え、この河谷は、世界でもっとも重要な渡り鳥の移動経路の一つである。

悲しいことに、今日のヨルダン川下流部はほとんど干上がってしまっている。その水資源の90%以上が流路沿いに建設されたダムやポンプ場で取水され、本来の流水の代わりに、下水、塩分を含んだ泉水、農地からの流出水が流れ込んでいる。ヨルダン川は軍用地・国境地帯となっているため、一般の人々の立入は禁止され、こうした問題が存在することを知る人はごくわずかである。

2001年以來、FoEME はコミュニティレベルで、老いも若きも含んだ住民と、また、河谷内のヨルダン、パレスチナ、イスラエルの最も重要な9つの自治体の首長とともに協働してきた。「グッド・ウォーター・ネイバーズ」と呼ばれるこのプロジェクトは、ヨルダン河谷を再生しようとする地域コミュニティ内の共同取

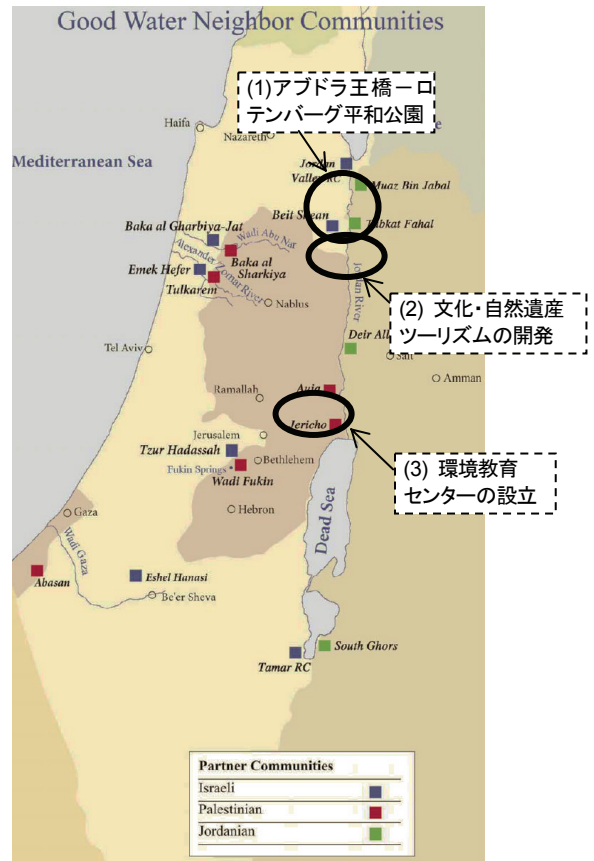


図1:「グッド・ウォーター・ネイバーズ」参加コミュニティ
および本稿で紹介するプロジェクト

(出典: http://www.foeme.org/docs/GWN_map_2007.pdf に記者加筆)

り組みを支援してきた。マイアミ大学の協力により、2005年にヨルダン河谷首長フォーラムが創設された。2006年には隣接する自治体首長の間で覚書が取り交わされ、それには国境を越えた協力活動に対する彼らのコミットメントが詳細に記述された。

本稿は、もっとも成功する見込みの高いものとしてコミュニティ自身によって挙げられたプロジェクトについて詳しくご紹介したい。これらのプロジェクトの第一の目標は、コミュニティ間の平和建設に向けた努力を進め、ヨルダン河谷の再生を支援することである。また、生活水準改善の手段としての経済開発に対する[コミュニティ]相互の関心の上にデザインされている。ヨルダン川の水資源は共有されたものである。こうしたプロジェクトは、現状の悪化した環境状況を覆し、健全な生態系に対する必要性を高める[だけでなく、地域経済にとっても利益をもたらすものである]ことから、経済的にも実施すべき十分な理由があるといえよう。

ギドン・ブロムバーグ (Gidon Bromberg)
地球の友中東 イスラエル代表
(Israeli Director, Friends of the Earth Middle East)
Nahalat Binyamin 85 - Tel-Aviv, 66102 Israel
info@foeme.org

(1) アブドラ王橋ーロテンバーグ平和公園

参加コミュニティ: Muaz Bin Jabal 自治体(ヨルダン)、ヨルダン河谷地域協議会(イスラエル)、Beit Shean 地域協議会(イスラエル)
共有の水資源:ヨルダン川、ヤムーク川

「アブドラ王橋ーロテンバーグ平和公園」は、2つの隣接する地域を結びつけるための提案である。1つは Al Bakoora/Naharayim で、ヨルダン川とヤムーク側の合流点にある小さな島である。もう1つは Jeser Al Majama /Gesher 地点で、歴史的にヨルダン川の渡河地点として知られている。

Al Bakoora/Naharayim : 1927年、ロシア移民でパレスチナ電力会社(PEC)の創立者であるピンチャス・ロテンバーグが、アブドラ1世ヨルダン国王と同社の水力発電所を建設するユニークな合意に達した。この目的のために、水路とダムが建設され、人工島が築かれ、2つの川[ヨルダン川とヤムーク川]の流れを発電に利用した。1932年までに水力発電所からヨルダン川の両岸への電力供給が開始され、1948年の第一次中東戦争の結果として運用が停止されるまで続けられた。1994年、ヨルダンとイスラエルの平和条約締結とともに、この島はヨルダンに返還されたが、イスラエル政府に、特別な用途[イスラエル人の営農継続]のために貸し出され、また、イスラエル人とそれ以外の国からの旅行者に対し、越境することが認められている。イスラエル側の入口である Naharayim からのツアーがあり、旅行者は島に渡り、眼下に流れるヨルダン川を一瞥し、発電所の廃墟を見ることができる。[イスラエル・ヨルダン両国の]軍が両岸のフェンスの開閉のスケジュールを調整して行っており、毎年何万人もの訪問者がビザなしでこの島を訪れている。これは、国境をまたぐ公園の好例であり、参加コミュニティは、蛇行するヨルダン川の2-3km下流にある Jeser Al Majama /Gesher 地点まで拡大することを提案している。

Jeser Al Majama /Gesher 地点では、ヨルダン川の歴史的な渡河地点の実例を目の当たりにすることができる。この場所は、ヨルダン・イスラエルの両国にとって等しく文化的な重要性を有する。ローマ橋は、2千年以上前に、当時の都市を結ぶためにローマの統治者によって建設された。その都市は、Beit Shean(現在イスラエル領)、ペラ、ウム・カイス(現在ヨルダン領)である。

この場所には、古い旅宿が中世から建っており、商人・旅人が東西に向かう途上でヨルダン川を渡り、自らの休息と[ラクダなどの]家畜に餌を与えるために足を止める場所の象徴となっている。オスマン帝国時代には、地中海に面する港町アッコ(アクレ)とダマスカスを結ぶ鉄道橋が建設された。オスマントルコはまた、税関と警察をこの地に設置した。1920年代、信託統治時代のイギリス当局が自動車のための第三の橋を建設し、ガリラヤ湖畔のティベリアスとシリアのダマスカスを結びつけた。

平和公園の計画には、貯水池を復活して「アブドラ



図2: アブドラ王橋ーロテンバーグ平和公園の構想図

(提供: FoEME)

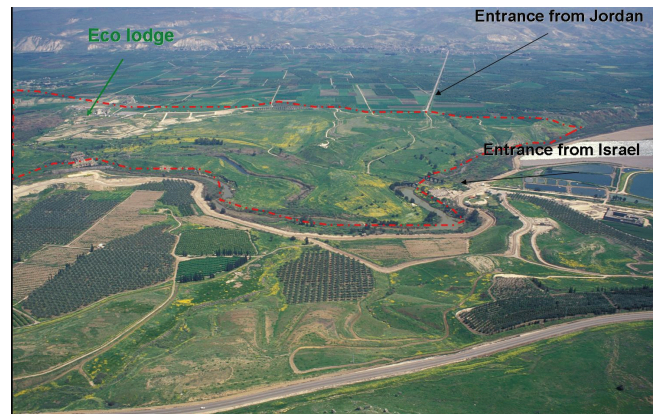


図3: 平和公園対象地の現況(イスラエル側より望む)

(提供: FoEME)

王ーロテンバーグ湖」を形成し、バード・サンクチュアリを創出することも含まれる。この湖は、ヨルダン河谷を年に2回通過する5億羽以上の渡り鳥を引き寄せらる。野鳥観察施設は、野鳥観察という趣味に時間とお金を費やすヨーロッパおよび北米の6千万人ともいわれる人々を、この地域に導くポテンシャルを秘めている。

それ以上に、発電所に隣接して残っている老朽化した労働者住宅は、1948年に発電所の閉鎖とともに放棄されたままだが、ヨルダン川と湖の素晴らしい眺めを望むことができ、エコ・ロッジとして再生できるし、発電所の廃墟はビジター・センターに変えることができるだろう。この地域は、自然美にも恵まれ、エコツーリズムサイトとして開発するポテンシャルは非常に高い。河岸に目立たないように隠されたネイチャー・トレイル[自然散策路]の整備も可能だろう。これにより、ハイカー、バイカー、バード・ウォッチャーは、島からジェセール/Gesher 観光地域に至る3kmの道のりを探勝することができる。平和公園は、段階的に整備され、第一フェイズは完全にヨルダン領内で整備されるよう提案されている。

ヨルダン川の両岸に保護区域を創設することにより、生物多様性の保護、共同管理や共同調査事業、ネイチ



図4:ローマ橋



図5:ローマ橋中央部からヨルダン側を見る



図6:ハロッド川の親水公園とネイチャー・トレイル

(図4~7 提供:西原弘〔2006年12月撮影〕)



図7:ハロッド川のネイチャー・トレイル脇の掲示板

英語で“Contaminated Water No Bathing”と書かれている。生活排水および養魚場からの排水が未処理で流されており、一見美しい親水公園だが、下水特有のにおいが漂っていた。水は緑色と茶色の混ざったような色。

ヤー・ベイスド・ツーリズムのための教育および協働の可能性が大きく広がるだろう。国境地帯は当然のことながら必要だが、ヨルダンおよびイスラエルはすでに数カ所で、管理されガイドされた観光活動のためにフェンスを開いた前例をもっている。ヨルダン河谷地域協議会（イスラエル）、Beit Shean 地域協議会（イスラエル）、Muaz Bin Jabal 自治体（ヨルダン）の首長は、ヨルダン河谷で最高の場所を回復し、地域住民に新しい機会を創出する平和公園を創設する覚書を取り交わした。

(2) 文化・自然遺産ツーリズムの開発

参加コミュニティ: Tabkat Fahal 自治体(ヨルダン)、Beit Shean 地域協議会、Beit Shean 市(イスラエル)

共有の水資源: ヨルダン川およびその支流であるジグラブ川、ジュルム川(ヨルダン)、ハロッド川(イスラエル)

Tabkat Fahal 自治体は、美しい自然景観に囲まれ、重要な考古学的遺跡に恵まれている。しかし、投資が不十分なため、これら貴重な地域は十分に開発されておらず、アクセスが限られ文化観光収入が上がるには至っていない。重要な文化遺産サイトで未開発の地域

の筆頭に挙げられるのが、印象的な史跡であるペラのデカポリスである。ペラにはキリスト教の最も初期の教会がある。もう1つの見所は、1世紀の複合文化施設である。400席の劇場、複合的の市民センター、公衆浴場、多数の墓石および霊廟、6世紀以降ビザンティン大聖堂として知られるビザンティン式の教会などがある。

イスラエルの Beit Shean 遺跡は、ローマ期のペラと姉妹都市で、非常によく整備され、毎年何万人もの観光客を集めている。近隣の自治体は共通の情報板、パンフレット、ツアーガイドの訓練、共同の文化遺産イベントの開催、国境をまたぐ文化遺産ツーリズムの開発などを検討している。ヨルダンおよびイスラエルのコミュニティに存在する共通の文化遺産に対する認知度を向上させ、文化遺産ツーリズムを中心とした経済的関係を築くことは、平和構築に向けての努力に多大の貢献をなすだろう。実際、共通の文化遺産に着目してこれら2つのコミュニティの絆を強めようとする努力は、この地域全体で繰り返し実践され得るモデルとなる。ペラにとって、国境をまたぐ観光開発は、現在利用可能な観光施設をグレードアップする新たな投資

を呼び込むのに十分な理由を与える基盤となるだろう。

さらに、ジグラブ川、ジュルム川、イスラエル側のハロッド川といったヨルダン川の支流は、ペラおよび Beit Shean の史跡の中を、あるいはその近くを流れている。残念ながら、これら3本の河川は現在いずれも汚染され、ヨルダン川に廃棄物を流し込んでおり、こうした環境状態は、本来この地域が持つエコツーリズムの可能性とはまったく逆行している。自治体は川の流れから汚染物質を除去し、自然・文化遺産をめぐる散策路をヨルダン川に至るまで整備しようとしている。

Tabkat Fahal および Beit Shean の自治体は、共通の自然・文化遺産ツーリズムの開発を支持する覚書を取り交わしている。

(3) 環境教育センターの設立

参加コミュニティ: Auja (パレスチナ)

共有の資源: ヨルダン川、ワディ Auja

以前は Ein El Ghazaleh として知られていた Auja 村は、パレスチナのコミュニティで、ジェリコの 12km 北方に位置し、ヨルダン川沿いの幹線道路沿いにある。その歴史的期限は、ヘロデ大王の時代、ローマ都市 Archillas の一部であった頃にまで遡る。今日、Auja は 10km² の面積に 4,500 人の人口を擁し、ジェリコに次ぐヨルダン河谷第2の規模の町である。主な収入源は農業だが、若干の商業活動もみられる。ワディ Auja は、Auja の泉から発して村の中央を流れており、その流域はラマラ東方の丘陵地帯からヨルダン川に向かって広がる。この地域の美しい自然と多くの史跡に加え、ワディ Auja は灌漑用水の第一の水源であることから、Auja の人々にとって非常に重要な経済的資源となっている。

Auja の泉は学校の遠足や家族レジャー客にとっての見所で、毎年何万人もの訪問者を呼び込んでいる。パレスチナ全域から学校の生徒が Auja の泉を訪れにやってくる。しかし残念なことに、ここには生徒や旅行者を受け入れる適切な施設がまったくなく、この地域の重要性を学んだり気づいてもらうことができない。現在、ワディ Auja は訪問者が残すごみで一杯である。この地域を観光地として整備することにより、地域住民の収入源を多様化し、観光活動を村内での宿泊・飲食等のサービス提供といった経済的活動に結びつけることができるだろう。

Auja の自治体は、環境意識の向上とヨルダン川とワディ Auja を保護する必要性についてのパレスチナ人の教育を始めようと提案している。自治体がこの目的のために確保している土地に、ヨルダン河谷環境教育センターを建設することが提案されている。現在ワディ Auja を管轄するイスラエル自然・公園管理局との合意に基づき、ネイチャー・トレイルの改修、ワディを快適に歩いて渡れる人道橋の建設、案内表示や掲示板の整備、公衆トイレ・ゴミ箱・ベンチを備えたピクニック場の整備を行い、ワディの再生を図ることが提案され



図8: ワディ・アウジャ (提供: FoEME)

ている。

おわりに—今後の活動および日本への期待

FoEME は、「グッド・ウォーター・ネイバーズ」というコミュニティ・プロジェクトを主導してきた。水資源（河川や地下水）を共有するコミュニティの間に国境をまたいで築かれたパートナーシップにもとづき、環境意識の向上と平和構築を進めてきた。こうした水資源への相互依存を利用することは、持続可能な水管理についての対話と協力を成功裡に発展させる基礎である。このプロジェクトにはヨルダン、イスラエル、パレスチナの合計 17 のコミュニティが参加している。老いも若きも、首長も自治体もみな、清掃活動、啓発活動から本稿で紹介したようなプロジェクトの承認に至るまで、活発に活動している。

今回紹介したプロジェクトの概算費用は以下のように見積もられる。

- 1) アブドラ王橋—ロテンバーグ平和公園: フィージビリティ・スタディに 10 万ドル必要で、これによって実際に公園を建設するための必要予算が決定される (おそらく数 100 万ドル)。
- 2) 文化・自然遺産ツーリズムの開発: 10 万ドル
- 3) 環境教育センターの設立: 3.5 万ドル

JICA (国際協力機構) より、既にヨルダン河谷における種々のプロジェクトに対する支援が行われているが、ここで紹介したプロジェクトについても、JICA の支援が得られることを願っている。

さらに、これらのプロジェクトは、地域の草の根のニーズに対処するために、コミュニティ自身から生まれたものであることから、こうした努力に対して、日本大使館による草の根資金事業(草の根無償資金協力)による支援を期待したい。